TEI 鼎談 DAN
学問と職業のカンケイから、大学進学を考える本

あなたは、まだ何にだってなれる。

京都大学 教育学部

教育と人間について様々な角度から学ぶことで、脳・心・人間・社会について多面的な考え方と批判力を身に付け、また、異質なものを理解し、人間らしさを守る態度を養います。地球社会の調和ある共存に貢献できる人材を育てます。

■大学生
浅川裕子 さん

■先生
明和政子 先生

■卒業生
中村優士 さん

CONTENTS

●プロフィール　●大学生活について　●就職活動、仕事について
●5年後に向けて　●高校生へのアドバイス

●プロフィール

京都大学教育学部のミッションは何でしょう？

■先生
“新しい学問を生み出す”というのが京都大学の重要なミッションであり、本学の教育学部に関しては、旧来の学問領域や既存の枠にとらわれない、次世代を支える「新しいアプローチからの教育」を創出する使命を担っています。今は、研究領域融合の動きもあり、人間を科学的視点で理解し、育てるための新しい学びの分野を作る流れが出てくると思います。

先生が研究されている専門分野を教えてください。

■先生
「比較認知発達科学」が専門です。私は京都大学の学部時代からチンパンジーの心の働きについて研究してきました。なぜチンパンジーかと言いますと、人間の心の独自性や特殊性について知ろうとした場合、人間に一番近い現生種であるチンパンジーとの比較を通じて明らかにできることがたくさんあるからです。人間がチンパンジーに似ているところは、“生物としてのヒト”がチンパンジー

との共通の祖先として生きていた時代にすでに獲得してきた心の働き、一方チンパンジーと異なるところは、ヒトの祖先がチンパンジーの祖先と枝分かれした後に独自に獲得してきた部分です。
私の恩師の一人である松沢哲郎先生（京都大学高等研究院特別教授／京都大学霊長類研究所兼任教授）は、ご自身で「比較認知科学」という分野を開拓され、チンパンジーの認知機能を解明しながら人間の知性の進化的起源について研究されていました。私はそこに“発達”という時間軸を盛り込むことで「比較認知発達科学」という分野を築き、人間の心の多様性、独自性がなぜ創発してくるのかという問題の解明に取り組んでいます。

研究のキーワードは何でしょう？

■先生
「人間科学」です。私の研究分野はもちろんですが、教育学部の各学問領域を学ぶ上においても人間の心の働きを「科学的」にとらえることは、今後ますます重要になると思います。
これまでは、例えば脳科学の分野であれば、脳の構造を細胞や遺伝子レベルで研究するミクロ表現からのアプローチは山のように実践されてきました。その一方で、人間の行動がそれによってどう立ち現れるのか、どうすれば適切に創発・発達させることができるのかという問題はまだ解き明かされていません。「人間がなぜこのように振る舞うのか」を検証するには、人間科学の視点がカギを握ります。

浅川さんは明和先生のもとで研究されているのですか？

■大学生
今は２回生ですので、専門的な研究に取り組むのは次年度の３回生からになります。２回生までに明和先生から学ばせていただいたことの中で、特に関心を持ったことを、「教育評価」という方向性から研究してみたいと思っています。
分野融合の重要性も実感しているので、発達科学がもたらすエビデンスにも常に学びながら、現場で生かすための基盤づくりをしていきたいです。

■先生
具体的にどういったことを研究したいですか？

■大学生
研究したいテーマは「学習性無力感」です。最近では自尊感情や自己効力感といった言葉を用いて語られることもありますが、そうした感情を経験する中で自分が成したことの影響について、例えば、「自分が何かをしても意味がないのでは」と思ってしまうのはなぜなのかを検証し、そう感じる人をエンパワーするにはどうしたらいいのかを学びたいと考えています。これまでにも臨床的なアプローチはされてきていると思いますが、私は違う角度で見ていきたいと考えています。

■先生
心に悩みを持っている人と向き合う場合、ただ心を見るのではなく、「身体」にも注目する必要があります。身体に何か変化が起こっているからこそ、心の働きにも何かしらの現象が生じるわけです。心の働きだけをみてなんとかしようとしても非常に難しいです。そういった視点で浅川さんも研究に取り組めば、従来にはなかったアプローチの方法を見つけられるでしょう。

■大学生
ありがとうございます。

中村さんが現在お勤めされているところは？

■卒業生

教育学部を卒業後、2016 年に文部科学省に入省しました。現在は高等教育企画課法規係という部署で高等教育を担当する局の窓口として連絡調整業務を行っています。

■先生

毎日とても忙しいんじゃないですか？

■卒業生

その通りです。国会議員や他の省庁、省内の他局から高等教育に関する依頼がある時はまず私の係に連絡が入ります。依頼内容に応じて適切な課につなぎ、つないだ回答を受けたあとも調整が続きますので、一日中電話が鳴り続け、メールが山のように届きます。

中村さんは明和先生の研究室のご出身ですか？

■卒業生

はい。学部時代は先生の研究室で「共感」をテーマに文化比較の研究に取り組んでいました。

■先生

中村くんは海外でのフィールドワークを通じて“生の人間観”を肌身で体感しています。よい意味で自由人ですし、私は彼のような人間がこれからの文部科学省には必要な人材だと思っています。

■卒業生

ありがとうございます。頑張ります。

●大学生活について

こちらの教育学部を志望した理由を教えてください。

■大学生

高校に入った頃から「教育」というものには力があると感じ始め、世の中にある格差といった社会問題も教育を通してなら解決できるのではと思いました。教育学部に行こうと決めたのは高２の夏頃です。

■卒業生

僕が教育学部に関心を持ったのは、自分が“子供好き”であったことがきっかけです。子供は謎に満ちたところがたくさんあると感じていましたので、そうした部分を科学的に解明するならやはり京都大学だと思いました。具体的に志望校を決めたのは高２の冬です。

実際に入学して、学び始めた時の感想は？

■卒業生

自分の興味に従って授業科目を選択することができるので、まずそこが高校と大学では大きく違うところなんだと実感した記憶があります。同時に、無数にある選択肢の中から自分が本当に興味のある事柄を見定めることに難しさも感じました。

■先生

大学は入学すれば自由に学べる反面、常に「何に興味があるのか」「何をやりたいのか」を考えて自らの学びに結びつけなければ、貴重な時間を無駄に過ごすことになりますからね。

■卒業生

おっしゃる通りだと思います。

印象に残っている授業はありますか？

■大学生

2 回生の時に受けた「教育方法学基礎演習」という実習授業は私の中でとても興味深い授業で、明和先生の研究室で学びたいと思うきっかけになりました。

赤ちゃんを対象とした脳イメージング実験

■先生

この授業では、プローブを頭部に装着し、脳の血流量の変化を計測する「脳イメージング実験」を体験する実習もありますね。f（ファンクショナル）MRI を使うような大規模な実験ではなく、「NIRS（ニルス）」というイメージング装置を使って私のラボで簡便に脳の活動を計測できるので、学生に積極的に取り組ませています。

■大学生

思春期や青年期の年齢になると、人は自制を効かせて自分が思っていることとは違うことを話したり言葉にすることがあります。でも言葉をコントロールできても脳波は自制が働かない部分ですので、それを先生が今おっしゃられた実験で可視化できるのはすごいと思いました。生理学の面で人間の奥深い部分にも迫れるんだと驚きました。

中村さんは印象に残っている授業はありますか？

■卒業生

「京都大学ブータン友好プログラム」で経験したフィールドワークが印象に残っています。

■先生

中村くんは 2 回生の時に「東南アジア青年の船」という内閣府の事業に参加した経験があったので、海外でフィールドワークをこなす資質は十分にありました。「京都大学ブータン友好プログラム」への参加は私からも勧めました。

■卒業生

ブータンでは現地の高校生 200 人くらいに協力してもらって「幸福感」に関する調査を行い、日本の高校生が感じている幸福感との違いについて、文化的に比較しました。帰国後は、京都大学の「霊長類・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」で開かれるセミナーで渡航報告をさせてもらう機会も設けていただき、とてもよい経験ができました。

■先生

やはり現地に出向き、肌身を持って何かを感じることはとても大事です。私はチンパンジーの研究をしている学生時代にアフリカに滞在した経験がありますが、現地の人たちと触れ合う中で得られたことは言葉で言い尽くせないほどたくさんありました。学生さんたちには、日常のあたり前の外側に積極的にとびだしてみてほしい。若いうちにいろいろな経験を積んでほしいです。

先生が学生を指導する際に心掛けていることは何でしょう？

■先生

学生一人ひとりに見合った教育や指導を行うことは自分の中でとても意識しているところです。本学の教育学部の学生は 1 学年が 60 人、そして幸いなことに研究室で 1 人の教員につく学生の数は 4 ～ 5 人ほどの少人数です。その中で「真の研究者になりたい」「トップ・オブ・トップスの研究に取り組みたい」という学生には、世界の超一流の研究者が書いた論文を読ませて学ばせますし、それをまねさせるトレーニングも行います。

一方で、学部卒で就職を希望する学生には、就職活動と並行しながらも、本学で最も重きをおいている卒業論文の作成に向けて、どういった方法で自らの研究や実験、調査を行えばよいかを具体的に指導します。ですから、一律的に「優」であるとか「良」であるとかの評価云々ではなく、学生個人が自ら立てた目標を達成できるように教員はバックアップしますし、そういう少人数ならではの教育ができるのも本学の素晴らしいところです。

●就職活動、仕事について

卒業生はどういった分野で活躍されていますか？

■先生

千差万別ですけど、私の研究室の場合、学部卒業後に就職する人と大学院に進学する人の割合は半々くらいでしょうか。就職で言えば、中村くんが勤める文部科学省はここ数年入省者が続いていますし、他の国家公務員であれば家庭裁判所で活躍している卒業生もいます。

■大学生

家庭裁判所に入られた方はどういった仕事をされているのですか？

■先生

調査官ですね。教育学部で学んだ発達科学や人間科学などの“心の科学”に関するスキルを生かせる部分が多くあるので、困っている人たちを助けたいという人は調査官として実務経験を積みながら自らの専門性を高めているようです。

■卒業生

家庭裁判所というと法学系のイメージがありますが。

■先生

確かに法学部出身の人たちが多いでしょうね。でも、家庭裁判所の仕事には、人間科学の専門性が必須です。とくに、これからの時代には、科学的視点から人間の脳や心、行動を理解することは不可欠でしょう。教育学部の学生がさまざまな分野に積極的にチャレンジしていくのはとても嬉しいことです。

“教育学部＝将来は教員”と思っている高校生もいますが。

■先生

本学の教育学部の場合、教師の職に就く人はかなり少数です。教員養成を目的とする教育学部は、既存の教育方法論などをベースに、何をどう教えるかというノウハウを学んでいくところが多いと思いますが、京都大学では既にあるもの・確立されてきたことに対し、「本当にそれでいいのか？」「従来の教育方法や法律のルールでいいのか？」という視点をもって最先端の方法論を開発し、検証します。そういう点で、教員養成を主とする他大学の教育学部とは果たすべき目的が異なっています。

■大学生

私は中学生くらいまでは教師になりたかったのですが、一人の教師になるよりも、さらに大きな教育制度などに関わるところで将来は社会貢献したいと思いました。そうしたことも京都大学の教育学部を選んだ理由です。

中村さんが文部科学省を志望した理由は？

■卒業生

学部時代に世界を旅する中で、日本の素晴らしさは「人」にあることに気づきました。人を形成する根幹に教育があると考え、国全体の教育システムを扱う文部科学省を志望しました。

■大学生
お仕事をする上でどのような時にやりがいを感じられますか？
■卒業生
先ほどお話しした通り連絡調整業務がとにかく多忙ですので、対応方針でもめている案件などがあれば、それをうまく調整できた時は充実感がありますね。
■先生
じゃあ、大変だと感じることは？
■卒業生
とにかく組織が巨大ですので、その中で行政の仕事を行う際には筋論が大切になります。時にその筋論に従って仕事を進めていかなければならない点に少し違和感を抱くこともあるので、そういった時は大変さを感じることはあります。

● 5 年後に向けて

将来の目標や夢について教えてください。

■大学生
いくつかあるのですが、まずは３回生から始める自らの研究に力を入れ、引き続きそのテーマにじっくり向き合いたい気持ちがありますので学部卒業後は大学院進学を希望しています。そして、その研究成果や知見を活かせる仕事にいつかどこかのフェーズで就きたいです。
将来は国家公務員さらには国際機関の実務者として、教育を通して人々が力づいていく過程を支える仕事がしたいと考えており、さらに学びや経験を積む中で具体的に決断していけたらと考えています。
■卒業生
僕は先ほどお話しした通り、日本の素晴らしさは「人」にあると気づき、人を形成する根幹に教育があると考えています。そうした仕事に従事したいという思いで国全体の教育制度やシステムを扱う文部科学省に入りましたので、今後も次世代のために頑張っていきたいです。今は高等教育を担当する局の窓口が担当ですが、将来的には幼児教育に関してエビデンスベースドの教育モデルを作りたいと思っています。
■先生
エビデンス（根拠・証拠）はとても重要な要素ですね。世の中の物事を決める際、例えば政治家なら言語表現を巧みに使って様々な議論をしますが、私たち科学者はエビデンスを持って示すことを重視します。そこが一番の強みであり、誇りでもあります。中村くんは実務者として、これから何かを決定していく立場で仕事に携わるのであれば、エビデンス･ベースドの提案は大事になるでしょう。
■卒業生
大学在学中、とくに先生の研究室では、どんな時でもエビデンスを重視するように教えていただきました。教育はどうしても経験則で考えがちですが、僕はできる限りエビデンスをもとに物事を考えるようにしたいと思っています。

先生が今後取り組んでいきたいことは何でしょう？

■先生

私が携わる学問は基礎研究の分野ですが、基礎研究であっても得られた成果をどのように社会に届け、世の中にどういう形で貢献していくのかを考えて具体化していくことは大事ですし、それが研究者としての私の次のフェーズだと思っています。『Nature』や『Science』といった世界的な科学雑誌に論文を発表するだけで役割を終えるのではなく、ちゃんと実用化につなげてこそ意義があります。これはノーベル生理学・医学賞を受賞された山中伸弥先生もおっしゃっていますし、私も本当に共感するところです。そういった視点で、社会の見る目や既存の価値観が大きく変わるような、インパクトのある研究成果を私たちの研究室から世の中に届けたいですね。

そうした研究のカギになるのは？

■先生

最初に「人間の科学的理解」が研究のキーワードとお話ししましたが、プラスして「サイエンス・アンド・テクノロジー」の領域も非常に重要になってくると思います。サイエンス“オア”テクノロジーではなくて、サイエンス“アンド”テクノロジー、つまり両方です。

最近、AI（人工知能）の話題がよく取り沙汰されていますよね。AI は大きな可能性を秘めていますが、決して万能ではありません。そう言えるのは、私たちのような人間科学に携わる基礎研究者です。もちろん私の研究分野でもテクノロジーを使わせていただいていますし、AI に本腰を入れている他大学と共同研究も行っていますからその可能性に期待を寄せるところもあります。そこに確かな人間理解の視点を取り入れ、私たちの知見を使っていただく。そういう領域融合の研究が今後どんどん進めば、既存の価値観を大きく変える新しい人間教育、環境システムを世の中に発信できると信じています。

●高校生へのアドバイス

こちらの学部をめざす高校生にアドバイスをお願いします。

■卒業生

京都大学の教育学部は、人を対象に学問を究めている優秀な先生や学生が集まっています。そうした環境に身を置いて学ぶことで、僕は「人」についての考えの幅を広げることができました。

ですから、自分自身の将来の可能性を広げるという意味で、この世の中には無数の選択肢があることを頭におき、進路を決める時はそれらの選択肢をできるだけ狭めてしまわないように心掛けることをお勧めします。

■先生

浅川さんからも何かアドバイスを。

■大学生

将来の進路を考える時は“自分ベース”で考えがちです。でも、そこでまわりに目を向け、今の世の中にはどういう問題あり、そうした問題と自分がどうつながっているのか、自分と社会がどうつながっているのかを考えることは大切だと思います。そこに、自分が興味を持っていることがどうかかわり、問題の解決にどうつながるのかといったベクトルを当てはめると世界観も広がるでしょうし、「何のために大学に進学して学ぶのか？」という答えを出しやすくなると思います。

■先生

浅川さんは「こういうことをやりたいから大学をここにしよう」という流れで進路を決めましたが、その順序性って実はとても大事ですよ。偏差値優先で大学を決めてしまい、入学してから「さて、どうしよう……」となってしまうと本人にとっても辛いことです。

■大学生
私もそう思います。もし興味の対象がなかなか見つけられないのであれば、自分が感じた関心事などを１つ１つノートに書き出し、“言語化”することをお勧めします。そうやって書き留めたことを家族や友だちに話したり、あとから見返したりすると、自分が感じて書いたことに対して「筋が通っている」「軸がある」と気づくこともあります。それが見えれば、根本で「自分は何がしたいのか」がわかるヒントになるのではないでしょうか。

最後に先生からアドバイスをお願いします。

■先生
私の専門分野でお話ししますと、人間の脳は 30 歳になるまで完成しないということが最近の研究でわかってきました。「今の自分はもう完成している！」と思ってしまう若い人もいるようですが、10 代の脳なんてまだまだ未熟で発展途上の段階であることを高校生の皆さんは認識しておくのがいいでしょう。だからこそ、「今の自分に何ができるのか」と決めつける発想からではなく、「自分は何をやりたいのか」という、情熱の部分を優先して進路を決めてほしいです。情熱の向くままに“やりたいこと”に突き進んでいくと、あとから具体的に何をやればいいのかもちゃんと見えてきます。
■卒業生
先生も高校時代はそういう情熱をお持ちでしたか？
■先生
私は情熱しかなかったかも。確かに受験勉強は大変だったけど、それを乗り越えられたのは、やっぱり「自分がこうなりたい」「これを学びたい」という熱い気持ちがあったからでしょうね。受験勉強って毎日やることは決まっていますから、あとは自分のモチベーションをいかに持続できるかだと思います。そうやって前に進んでいると成績や順位は必然的についてきます。熱い気持ちを持って受験を乗り越えた方は、大学に入ってからも強くなれますよ。

大学構内のお気に入りのスポット

■大学生
教育学部の棟の１階に学生たちが集えるラウンジがあります。私はそこが好きで、空き時間などによく利用します。
■先生
そこで先輩たちと話をする機会もある？
■大学生
はい。課題をこなしていると学部の先輩や大学院の方が声を掛けてくれるので、相談にのってもらっています。
■先生
中村くんが大学時代にお気に入りだった場所は？
■卒業生
正門を入ると時計台がありますよね。その裏にいくつかベンチがあるんですが、授業の合間にそこに座って音楽を聴いたりお菓子を食べたりしていました。ちょっとした息抜きができる場所でお気に入りでした。
■大学生
先生はどこかお気に入りの場所はありますか？
■先生
研究室に入ると忙しくて外に出る機会があまりないですから、キャンパス内ではなく、近くの「京都御所」の自然の中で、心と身体を感じる時間かな。

●インタビューに答えていただいた方々●

■先生

明和政子先生

京都大学大学院教育学研究科教授

富山県立高岡高等学校出身。京都大学教育学部教育学科卒業、同大学大学院教育学研究科修士課程・博士後期課程修了（博士：教育学）。京都大学霊長類研究所研究員、京都大学大学院教育学研究科准教授を経て現職。日本学術会議連携会員、東京大学大学院総合文化研究科客員教授。学部在学中から、ヒトおよびチンパンジーの心の働きとその発達の道筋を比較検証し、それらが獲得されるプロセスについて解明。「比較認知発達科学」という新しい学問分野を世界に先駆けて開拓した認知科学者。

■卒業生

中村優士さん

文部科学省高等教育企画課法規係勤務

滋賀県立膳所高等学校出身。京都大学教育学部教育科学科卒業。学部時代は「共感」をテーマに文化比較の研究に取り組み、ブータンと日本の高校生における「幸福感」の比較について卒業論文を作成。在学中は内閣府事業の「東南アジア青年の船」や「京都大学ブータン友好プログラム」に参加。現在文部科学省で国会議員や他省庁、省内の他の局から受ける高等教育に関する依頼の対応・調整業務に従事している。

■大学生

浅川裕子さん

京都大学教育学部教育科学科２回生（2016 年度取材当時）

兵庫県立洲本高等学校出身。教育制度について深く掘り下げて学びたいという志望動機のもと、高校２年の時に京都大学教育学部を志望。入学後、教育に関する基礎的な専門科目を学び、次年度の３回生からは「学習性無力感」をテーマに自らの研究に取り組む予定。課外活動として、在日難民の定住支援プロジェクトや環境問題や平和、貧困などの地球規模課題の解決について考え合う場づくりに取り組んでいる。学部卒業後は大学院への進学を希望している。